



~13
4391
5



713
4391
5

談傳奇桃花流水卷之五

第十五回 没水

江戸 山東京山 編次



雲にまゝに栢木小君寺へ地獄坂めて危き難をのりて
 逃去けり何國とめてと志をこゝもなれへ或深山の我々より
 行やとて山と枕として木実ふ飢とまのまの荒磯の
 漂々々に打臥て浪の音の夜と明し骸の顛顛と長て
 見るにわけもなき流落のまゝいとわづれり子とて夜の無
 叢の雉子いさもこそあらしめ目とらるる花の朝心と
 このまゝある月の夕も一日の糧をいれれば血と懸るうさ
 かく半日の命をうけつゝきて乾くひぬる血の涙木葉衣

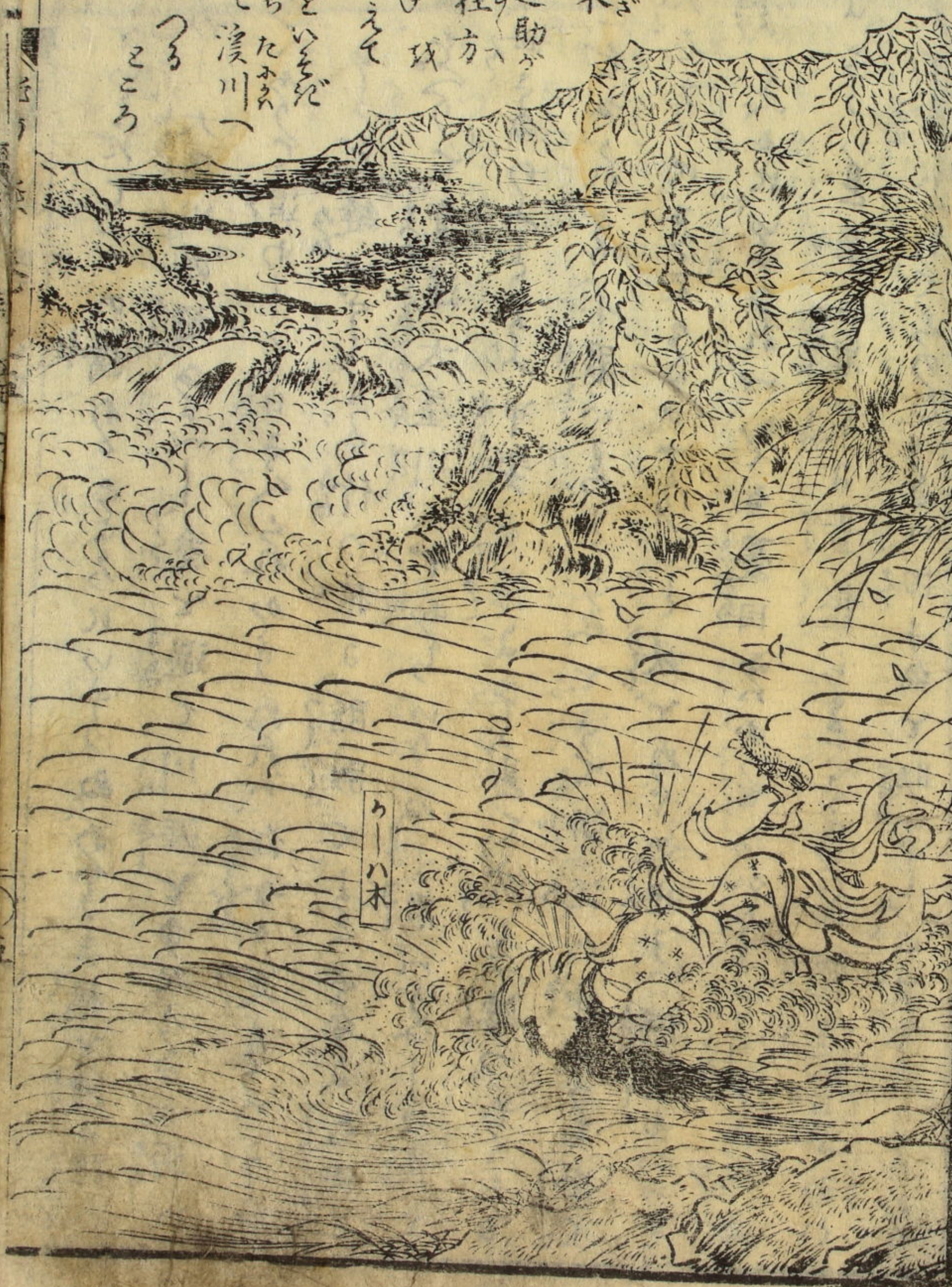
物ものののこのこの方かたにに見みええされさればば旅たび僧そうがが彼か名な所ところとと問と問とるるかかららんん男おとこ者もの
てて曰いハハ橋はしのの古ふる跡あとハハ池いけ鯉こい射やうう八はち町まちをを多おほ東ひがしのの方かた牛うし田で村むらとといい
所ところのの松まつ原はらハハ石いし標しるしわわりり是こゝよりより左ひだりへへ入いるる事こと七しち町まちをを久ひさそととと一いつ堆たいのの
丘かみ山やまありあり其その側かたのの凹くぼみみのの池いけのの形かたちのの芝あは生なととささしてして燕つばき子こ花はなののわわじじ
所ところとと中なかのの其その北きたのの方かたハハ遇あ妻つま川がはとといい流ながれれてて今いまハハ土つち橋はしとと架かせせりり
昔むかしハハ八はち橋はしとといい流ながれれとと口くち碑いしとといいええののううのの丘かみ山やまハハ業なり平ひら
塚づかありありこれこれハハ後のち人ひとのの彼か物ものががささりりにによよりりてて建たてたてたるるののああららんんとと細こまかか
とといいええられらればば旅たび僧そうとといいふふかかららんんとといいてて礼らいとといいふふ又また曰いわわるるのの古ふる跡あとののああららんんとといいふふ
无な量りやう寺じとといいふふにに伊い勢せ物もの語ごのの古ふる画えのの繪え卷ま物ものありありとといいふふかか
いいりりふふええののああららんんとといいふふ男おとこ者もの答こたへへてて曰いわわるる去き物ものののああららんん今いまハハああららんんとといいふふ
ままししいいふふ伊い勢せ物もの語ごとといいふふをを業なり平ひらのの作しりりとといいふふ又また宣のたま平ひらのの官くわん女によめ

伊い勢せのの作しりりとといいふふ又また諸しよ冊さくのの尊そんののみみとといいふふ男おとこ女によめ物もの語ごとといいふふ
伊い勢せのの二に字じハハ畧りやく訓くんとといいふふとといいふふ名なづづけけとといいふふ説せつももああれれとといいふふ清せい輔ほがが
袋ふくろ草くさ紙しハハ業なり平ひらのの作しりりとといいふふ一いつ変へんせせりりとといいふふそれそれどどかかのの物ものががささりりとといいふふ
仁に和わのの御ご門もん芳よし川がはのの行ゆ幸ゆきハハ業なり平ひら没ぼつ後ごのの変へんらられればば敢あてて在あ氏しのの葦あし
とといいふふ業なり平ひらハハ元げん慶ぎやう四し年ねんにに薨そうトトいいふふ大だい和わ園えん在あ原はら寺じハハ葬そうとといいふふ
世よふふヤヤセセとといいふふ河か海かい抄せうハハ吉きち野の川がはありあり昇のぼ仙せんとといいふふかかららんんとといいふふ
物ものとといいふふががわわのの問ととといいふふ語ごとといいふふ旅たび僧そう憎にくみみとといいふふ業なり平ひらハハ仙せん人ひととといいふふとといいふふ
ちちとといいふふ男おとこがが好このむむとといいふふとといいふふとといいふふ物ものとといいふふ男おとこもも薄うすとといいふふ
口くちとといいふふ閉しぬぬ松まつがが根ねハハ腰こしひひけけるる赤あか親おや父ちちハハ馬うま長ながとといいふふとといいふふ池いけ鯉こい射やうう
馬うま市いちのの話わををいいふふとといいふふ声こゑ高たかまりまり其そのささららにに稚こ見みとといいふふ伴ともいいふふとといいふふ女によめ
菓くだのの荷かのの賣うりりとといいふふ男おとことといいふふとといいふふ江え南なんのの渡わた橋はしとといいふふ柳やなぎ下したのの惠めぐみ太たハハ

矢矧の関帳へ行って飴と賣に、よく賣きで多くの利と得ること
きぬ和のて行て菓とより多く、菓売が曰我由一日の
中死て賣つるもの、つらぬと黍詣へおなれども、そのごとく賣も
せど、草臥りけの錢少あり、あつてさあぐの見せ物芝居ありて慰よ
行んぬ、あつてさあぐん、此度関帳めて錢まうけさるる、童の力持
あり、女曰其子の藤川の宿めて物持さるる、就馬よりきて令助
よりその小評判の児ありと、まが夫やと、菓よりつらぬとかの
三之助あり、都より下りさる、弥四六と、りの大金や、三之助を
かえ、又せりのふらつて、都の人へ除オグといと話を、栢木の
かくと、さうつと、とせし、菓よりむら、驚よと、三之助
怒し、ま愛し、見たり、おせし、狂い、人ぐ、これと、

この氣ちがひよと、おどろけ、小君へ母と、おとめ、つらぬと、これの物狂よて、
まれば、无礼へあり、あつて、今宜い、三之助と、此さ、これと、
ゆらりのゆ、其住里へ、つぐくめて、ゆと、腰と、おとめ、たぐひ、なれば、菓売
り、此、此、兒、女、人、大、大、魂、消、さ、さ、り、小、女、が、あ、り、し、さ、み、
と、つ、ある、こと、と、ま、べ、三、之、助、が、親、の、藤、川、の、わ、ら、う、る、宮、路、
山の麓と、ま、一、に、用、度、あ、つ、ば、か、一、と、つ、づ、み、行、と、み、猶、遠、く、
ま、ま、一、と、れ、ご、と、栢、木、に、蹴、ら、つ、ま、れ、る、菓、と、拾、ひ、わ、ら、む、ら、ま、の、
お、く、さ、に、途、で、同、き、も、せ、ど、う、ま、つ、さ、に、胸、騒、ぎ、て、暗、間、さ、さ、ま、ま、ご、
母、の、手、と、ら、う、て、木、蔭、に、立、つ、を、る、る、藤、川、の、宿、へ、東、の、方、と、ま、れ、る、
雨、は、ぬ、れ、つ、い、そ、死、な、り、小、君、の、道、を、ま、る、栢、木、お、ま、ら、ぐ、の、は、し、ま、せ、
な、れ、ば、狂、う、心、あ、も、我、子、は、わ、り、さ、る、と、ま、て、よ、う、と、ま、か、ま、り、あ、い、

柳木
 三之助が
 往方へ
 たがひ
 尋えそ
 ち
 路どいそだ
 ありまら
 過て溪川へ
 おつろ
 ころ



猶路とつとだて。一つの橋のそころにゆりぬわきき橋と渡る陸人
とよみ大屋川の橋あるべし。爰と過て川涯とゆえくる父雨の
まきとくありて道わくく日さへれかりぬれば。狂女が足りてへこと
ささりあしむと縫いしうる竹の根は。踏踏とよとさぬは打倒
泥まきりて真逆大屋川へぞあちりぬ小君はるし声と
わび母さぬのよとよふ甲斐も浪まゆきて沈る浮つゆへも
あどどなれり。小君はるしとこえとよて。淤泥の中へち臥て
絶入をうりにええくるがやうくと候とぬぐひ世の河伯もあつを
とすまぶるに。ゆりなれはける憂目あつをぬかふるぞ。月ごろ地獄
坂よとつと居て。鬼芝は責懲らま。さぬぐ。慙怒目あつ
とると命にゆりてあつびつる。母さぬと助ふ。由良之進ふめど

わひて。父上の敵を打修羅のあつをなすさせんと。あつをさる一念と
神もあつまでおぼしてや。摩利支天の御蔭もて危命助りて
爰か。こさぬゆいあつ。今日とつとぎも三之助が生て此をよ
わしとま。母さぬのうま。あつ。今日の先はあつ。やうあつ
月ごろの血の涙も。今日のうま。ま涙あて。洒んとあつ。此川の
りづとあつ。死顔さへもあつ。まぬと。よく。薄き親子乃縁
ゆり。前世の悪業を。今思ひあつ。これ。ゆり。母人の口を
て。ひり子にわひやの川とき。つと。あつ。行備の白浪の音と
の。まひ。此白浪ときえあつ。前表あて。あつ。是か。あつ
形見と。泥は印せ。足跡は。額とつて。哭あつ。ひせ。り。あつ
不便さ。詞あつ。小君は。あつ。涙と。あつ。暇令三之助

尾峯おのねの墓かぶ糸いとり。黄昏たそがれの光ひかりのさうとつらまらふにさうさ
 おそひのぶくしと。かゝ立てたて簾すだれ作つくが燈あかり火ひうを方あた燈とうのしけごと言いつ
 たりくりに戸とら口くちと明あて飯いり来きし尾おの峯ねがわとよりひとりひとりの小せう女にょ
 二人ふたりのさるうらうらもどろた。あひけざる小こ君きみさぬ。こゝ夢ゆめあつら
 寤さりしと。とりをぐりする顔かほとんと。アアあゝ清きよ舟ふねの由ゆ良ら之の進しん一人ひとりの
 弟あにの簾すだれ作つくなる。こゝをとりと全ま従つがつきぬ。縁えりはめり。前まへ
 そのつまうまやいりあつん。三さん之の助すけにもあひせなれば。兄あに弟あに手ては
 手てととりえし。あつらりわりのことをきた。尾おの峯ねのこゝをとり
 膝ひざとうち。さそひおんりのがらにまあらびら。小こ君きみさぬ。おじ
 なる。それともさしき。善ぜん太たが墓かぶまわりのかろき。あつらさしき。命いのち
 助すけのさうと志しくぐのう。物もの語ごは。由ゆ良ら之の進しんの作つく大おほなる。

妍あや君きみの尾おの峯ねの。弟あに右みぎの柴え乃の六むの二につの命いのちとさしき。ほし
 ふう丸まる縁えりあつんと小こ君きみと中なかに左ひだり右みぎより母ははの更さらとさしき。小こ君きみ
 何なにと返かへ答こたゆ。さつまりさる鳩はと尾おへ又またと刺さす。あひまて。気きをとり
 つめて剛ごう絶たつなり。うんとつらけり。久く之の顔かほの色いろもろろ。なれば人ひと
 周しゅう章しょうて懐なつおじ。由ゆ良ら之の進しんの腰こしさげに。野のへ持もちし。気き付つけさ。齒はと関せきて
 さあつされ。尾おの峯ねの厨くは。えをゆたて。木き植うの水みづと口くちふ。會あひ。面めん上じやうへ
 吹ふけて。三人さんにんいさく。声こゑとわけ。小こ君きみさぬ。こゝ心こゝろとさしき。あつら
 小こ君きみさぬ。い。のめくと。呼よ声こゑわさる。空あまえなれば。小こ君きみとより。い。され。人ひとぞと
 明あて。おれ。さる。門かど口くちより。つとせ入いり。ささ。と見え。水みづは。濡ぬる。わ。あ。の
 女めより。く。見え。ば。栢かし木きなれば。二人ふたりの夢ゆめは。夢ゆめ見みし。こゝろ。さる。栢かし木き君きみあて
 おい。り。さ。と。手てと。とり。て。座ざよ。つ。な。れば。三さん之の助すけの。け。より。さ。母ははさ。



柏木
 三之助
 親子
 再会
 圖の

講義卷之五

汝等此來あること。うらめてやうた由あるん。語りまはせよと言
とてくりのえんば人く此体と見てもそのようふりよ由さうなり主従四人
この作尾峯のさぬぐの難とられあしりやうま一命とれとりて六人
一衆又集るこ類のまれある奇遇あり

第十七回 窺柵

星合提之助照連ハ某の判官に内通あり主衆と亡く莫大の
恩賞と得其勢ふ衆とて再大望と企んとしに。煌々たる天鏡み
照されて悪吏忽ふあしり近江國と逐電なきが秋季どより都へ
訴へ人形とあてせんま叢一たればかーとてワクし三河國某の
郡岩卷山に住山賊の魁首とありて在るかに爰より尾峯の所へ
僅ふ七八里とあり隔れば手下のりのも由良之進等が莫とす

あうぐのよう告られ提之助かの牛平とちくりし由良之進等
我と敵とつけ移らうし。手下の奴等があしりれば打捨ておれど
明日の夜手下と引具して渠等が住家へかーとせ。塵ふせん
あハ汝今夜彼所へ行竊は其地理とやがひ来るべし外は
所用あり形と馬長と打捨て一人の小賊とあさぐ。知立の馬市又至て
我衆料の駿足とあり馬ハ小賊とひせて先へ候し。汝ハ夜に入て
かーくあふべしとて金子とけしければ。牛平令とうけて座と
提之助再牛平とよぶとあり。今宵の莫ハ我ハあなる一美なり
例の酒は仕損トも。木嵐の六小猿の八等ハ。間謀は各を
のこるれども由良之進等が面と見えしければ用ひが
鳥の巢とく嗅きしれと令トされば。牛平とあえて小賊

山とくうりてまが知立へぞつを死なむ。扱行わどふ。二里わまり来り
 一の村より。酒店の前と過るが一人の容氷机。腰をけ茶碗
 酒と浪々とうけむ。飲とて。酒舟の牛平口は唾とひたさる。日
 かりけて通りつるが。立ちまうて小賊はむら。これより。ゆくうれハ二里
 わまりの廣野みて。懃て茶店ゆるなれば。此所めて一杯と喫ま
 べし。とうらきて。酒店ふ入馬。買て大金とりらるれば。あつ
 心驕りて。美酒佳釀と令。二人うらむ。て。献つ。酬つ。あつ
 飲れば。大酒沈酔。足れも。浪く。と。酒店と立りて。かの廣野
 ふさ。か。ア。る。が。一。さ。らの。徑。も。三。さ。び。四。さ。び。ふ。ん。を。て。足。の。踏
 河。も。さ。り。う。り。に。兩人。是。生。に。倒。臥。し。高。隼。し。寐。入。り。か。て
 暮。て。夜。風。は。醉。と。吹。さ。ぬ。さ。れ。か。の。小。賊。突。然。と。る。と

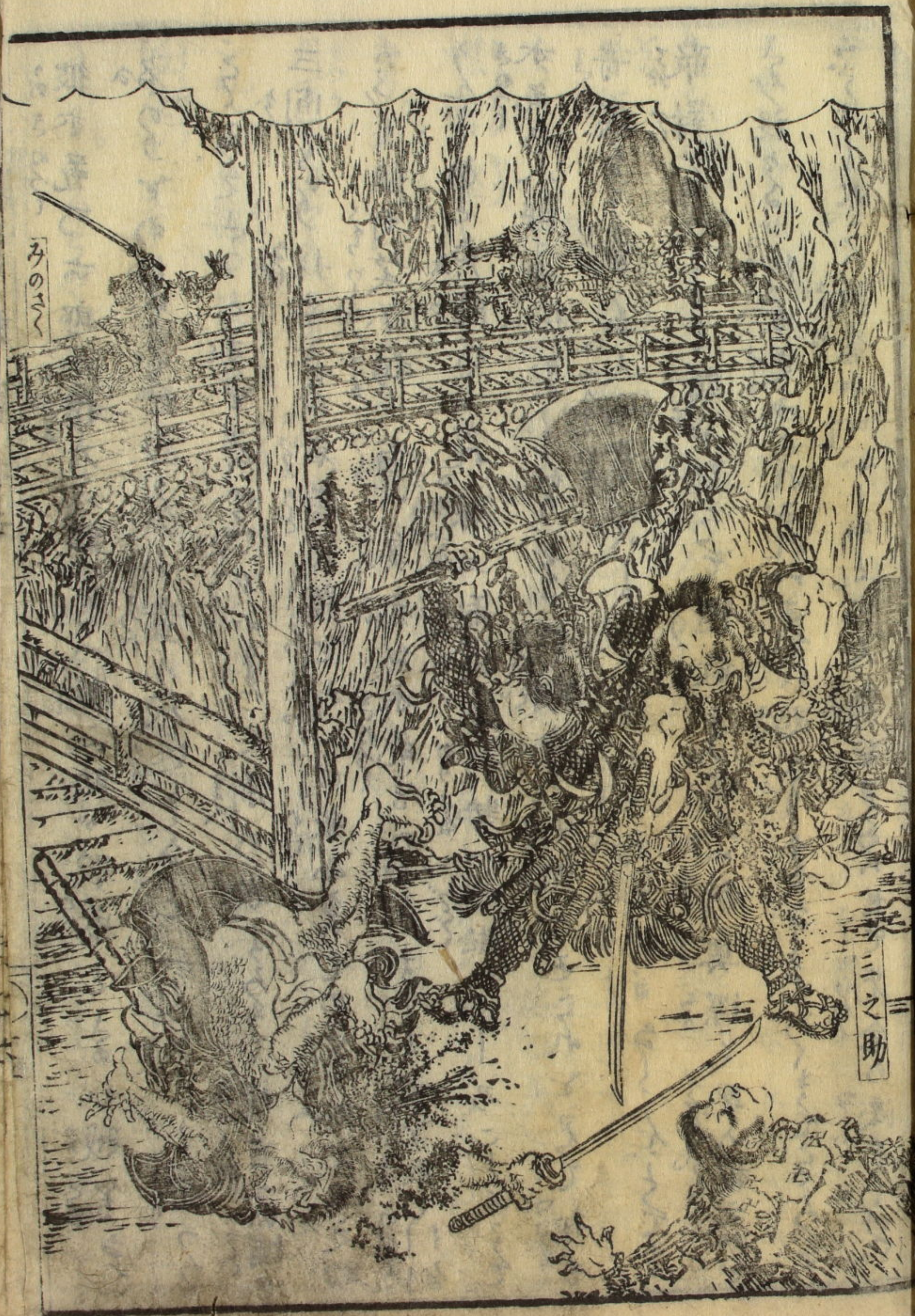
おじ四邊と見と大おどろき。牛平と呼おこ。い。な。れ。ば。牛。平。も。打
 か。ら。れ。小。賊。に。む。ら。ひ。か。時。と。う。ら。し。て。夜。に。も。入。ぬ。れ。ば。馬。市。も。と。り
 つ。ん。馬。と。率。と。て。山。は。く。し。ぶ。舞。首。が。例。の。榜。答。と。喰。み。べ。し。我
 最。前。の。酒。店。が。馬。房。は。肥。馬。と。つ。ま。だ。さ。と。入。て。あ。れ。さ。り。汝。う。と。ふ
 志。の。バ。ッ。馬。と。盗。と。て。ひ。れ。え。り。知。立。めて。買。り。と。い。つ。ま。る。べ。し
 榜。と。喰。さ。り。の。と。ろ。ぎ。馬。の。價。の。此。金。我。と。汝。と。馬。の。脊。は。つ。し。よ
 分。つ。べ。し。と。甘。き。話。ふ。雲。が。ま。う。て。駈。け。り。さ。る。膝。栗。毛。酒。店。と。し。て
 い。そ。だ。り。牛。平。の。小。流。の。水。と。掬。し。て。酔。さ。り。の。渴。と。医。し。裾。鶴。脛
 又。か。け。路。と。い。そ。ぐ。わ。ど。に。初。更。の。と。ろ。尾。峯。が。家。ふ。り。り。透。垣。と。潜
 て。戸。口。の。り。と。よ。志。の。バ。ッ。戸。の。隙。間。より。覗。見。る。に。由。良。之。進。燈。火。乃
 れ。よ。坐。し。り。人。影。も。見。え。な。れ。を。牛。平。も。あ。り。我。由。良。之。進。と。打。ら

山とくうりてまづ知立へぞつを死なむ。扱行わどふ、二里わたり来り
 一の村より酒店の前と過るる。一人の容泳机、腰をうけ茶碗
 酒と浪々とうけおしくと飲とえて。酒毎の牛平口は唾をひたさう
 おりけて通りつるが、立ちまうて小賊よりひひ、ゆくは二里
 わまりの廣野みて、憇て茶店ゆるる。此所にて一杯と喫ま
 べしとうらまきて酒店へ入馬と買ぶ。大金とりらるればおのづ
 心驕りて美酒佳釀と令ト兩人うちむひて、献つ酬つとてふ
 飲れば大酒沈酔し足れも浪々として酒を立りてかの廣野
 おさうかへるるが、一むらの徑も三きざり四きざりふんをて足
 さりうらむに、兩人芝生に倒れ臥し高隼して寐入りかて
 日ましく暮て夜風は酔と吹さぬされかの小賊突然とる

おじ四邊と見て大おどろき。牛平と呼おこし、死なば牛平も打
 かざらん小賊にむひかく時とらうして夜にも入ぬれば馬市もどろ
 っらん馬と率きて山より下り、舞首が例の榜笞と喰ふべし我
 最前への酒店が馬房は肥馬とつたれとておれさう、汝うとふ
 志のびり、馬と盗とてひたえり。知立めて買ひりしといふるべし
 榜と喰さるのともぞ馬の價の此金、我と汝と馬の脊よりしよ
 かつべしと甘き話ふ、おれがまうて駈けり、膝栗毛酒をこして
 いそ死なう、牛平は小流の水と掬して酔さぬの渴と医し、裾鶴脛
 よかけ路とつぎむらどに、初更のころ尾峯が家ふり、透垣と潜
 て戸口のれよ志のびり、戸の隙間より覗見るに由良之進燈火乃
 れよ坐し、多に人影も見えされを牛平らふやう、我由良之進と打

何支も命が物種棍の悪吏の次第のとうとうおまきをやらんと鶴を
 手討にせし、夏地藏坂の悪計柴朶六と遠矢ふかけり、夏とも落も
 のとさど語りたり。由良之進猶棍之助が栖家とて、孫岩卷山の案内を
 せし、くまて牛平とて空房のうらふ繫まおれぬ。これいづれとされば
 り棍之助とて、めざさば牛平とて、証人とあり。近江ふくしうとて、
 左邊門が无実の罪は自殺せしと秋半とて、上主家を起えん心とあり。
 並くの者うんぬ、一時の怒は、兼平が首を刎げば、由良之進の
 実の思慮ふた忠臣たり。かくて簞作と計りて岩卷山は打入んと
 ぞんども、めまこの手下わりとて、素脱みておちつたり。牛平が丹精
 かりしる金子おとせとて、私に用うべきにあらんと、集め借うけ此金とて
 鎌帷子針臙楯の類十分小調いられ、次の夜由良之進の休

三之助にあつて、おの固く堅固より、岩卷山の麓ふりりし時
 を、三更の頃あり、牛平が告るふとて、よてりけり謀ごとされば、
 ありとみ酒店とひきて、棍之助が目代とて、旅人多が荷物懐中と窺
 者の家よ放火し、山の上の賊も火をとりんと、大勢
 山とらりたり。由良之進等へ賊をも十分は偽引て、放火の光は
 路とらりて、間道より躓り、三之助先ふとて、大斧と
 りて柵門と打やぶ。各うけく、叫呼で斬ていれ、小賊等不意と
 うらて狼狽あり。大斧より、騒ぐ中へ、よて用意の投明松と
 らげらじし、光りのあつたり三人が、從横无尽に、討る者
 数とありき。三之助の幼年なれども、磨六郎が武勇とて、
 膽氣烈しく、大斧と電光のこころひらして、四角八面は切散を



みのま

三之助



るる
山中
三之助
復讐
之の
図

由良之権

六段
三之助
復讐
之の
図

彼この木き靴くつ乃の六む郎らう小こ猿ざる乃の八は郎らう等らへへ棍くわん之の助すけがが股こ肱うととよよむむ賊ぞく等らええ。
各おのののりりををわわけけててむむせせむむふふ小こ童どうめめ伏ふ逃にままとと。二に人にんののししくく斬きつつるる。
ううろろええううろろととおおととくくいいせせばば。カカののままろろてて前まへ乃の方かたううろろくく襟えり首くびのの捆むすでで。
三さん間かんををりり投なげげまませせばば。岩い角かくにに頭かぶとと打うつつけけ。朱しゆふふりりててののれれ卧ふとと。三さん之し助すけ。
ううろろくくにに打う笑わら小こ猿ざるがが面つらへへ真ま赤あかのの木き靴くつももののぐぐととままどどとと。腰こしとと取とりり倒たふ。
ううんんととののとと声こゑ踏ふひひいいれれ。眼め玉たま屈か出で。形かたち勢いきほのの地ぢ獄ごくおおくく。乃のここととくくてて。
木き靴くつ乃の八は郎らうええ。似にあありりりりるる。最さい期きままりり。小こ賊ぞくををここれれとと見みてて。叔おゆゆ。
奇き異いるる童どうるる。人にん間かん業ごうににくくととああはは。小こ天てん狗くのの化けかかりりんんととててもも。
敵てき對たいするるままどどとと頭かぶととおおくくてて逃に散さん多た。三さん人にんへへ猶なほ奥おく深ふかくく馳は入い棍くわん之の助すけとと。
ううろろくくるるがが。行ゆ方かた更さらおおままれれざざんん。ささてて逃にままりりるるううろろくく。かかくくままををくくてて。
ううろろくくにに。不ふ踐せん念ねんヤヤ口くちおおくくとと。三さん人にん顔かほとと見みああははせせてて。无む念ねんのの涙なみだををくくてて。

わわるる油あぶら断たきき見みををぬぬくく。天てん井せいよりより飛とぶぶ。詞ことばももままぐぐとと斬きてて。田のち良ら之の進しん。
ここままととかかけけ。ヤヤアア汝なへへ星せい合あ棍くわん之の助すけ。乃の悪あく吏しへへああががええりりんん。系けいととああぬぬりりぬぬ。
ままとと。詞ことばのの下したよりより三さん之し助すけ。唯ただ々々合あ点てんををやや太たい刀とうととひひりり。手て捕とらににせせんんとと男おとこ立た。
斧きりぎりすををひひりりとと投なげげてて。鶴つるおおととびびくく。鶴つる乃のををままくくもも勝かちととひひりり。潜ひそりり帯おびとと細こでで。
ううろろくく。建たのの大おほ地ぢへへ投なげげををくく。おおもももも立たをを左ひだり右みぎよりより。忠ちゆう臣しん美み心しんのの兩りやう人にんがが。
襟えり首くび壓おさててんんととくくせせどど。高たか手て小こ手てみみぞぞりりああるる。突つここららぬぬ形かたち勢いきほ。
ありあり。此この時ときどどくくととああるる。鶴つる一ひと羽う飛とびびききりり。棍くわん之の助すけがが頭かぶのの上うへとと无む拜はいめめぐぐりり。
月つき下くだににここららぬぬ音ねととううろろくく。乃のままりり光ひかりととああららししてて。西さい方かたへへおおびびりりるる。あありりよよ。
ここれれへへかかのの鶴つるがが怨えん意い鳥とりとと化けししてて愛あいににままりり。恨うらみととううろろくく。浄じやう土どのの。
往い生せいととおおびびりりるるううろろくく。かくかくてて之の人にんへへ落おちち手てももああららぬぬ。年とし来きた乃の本ほん望ぼうをを。
ううろろくく。ううろろくくととかかくくううろろくく。簾すだ作さく一ひと疋ふた乃の馬うまととひひたたししりりてて。三さん之し助すけとと。

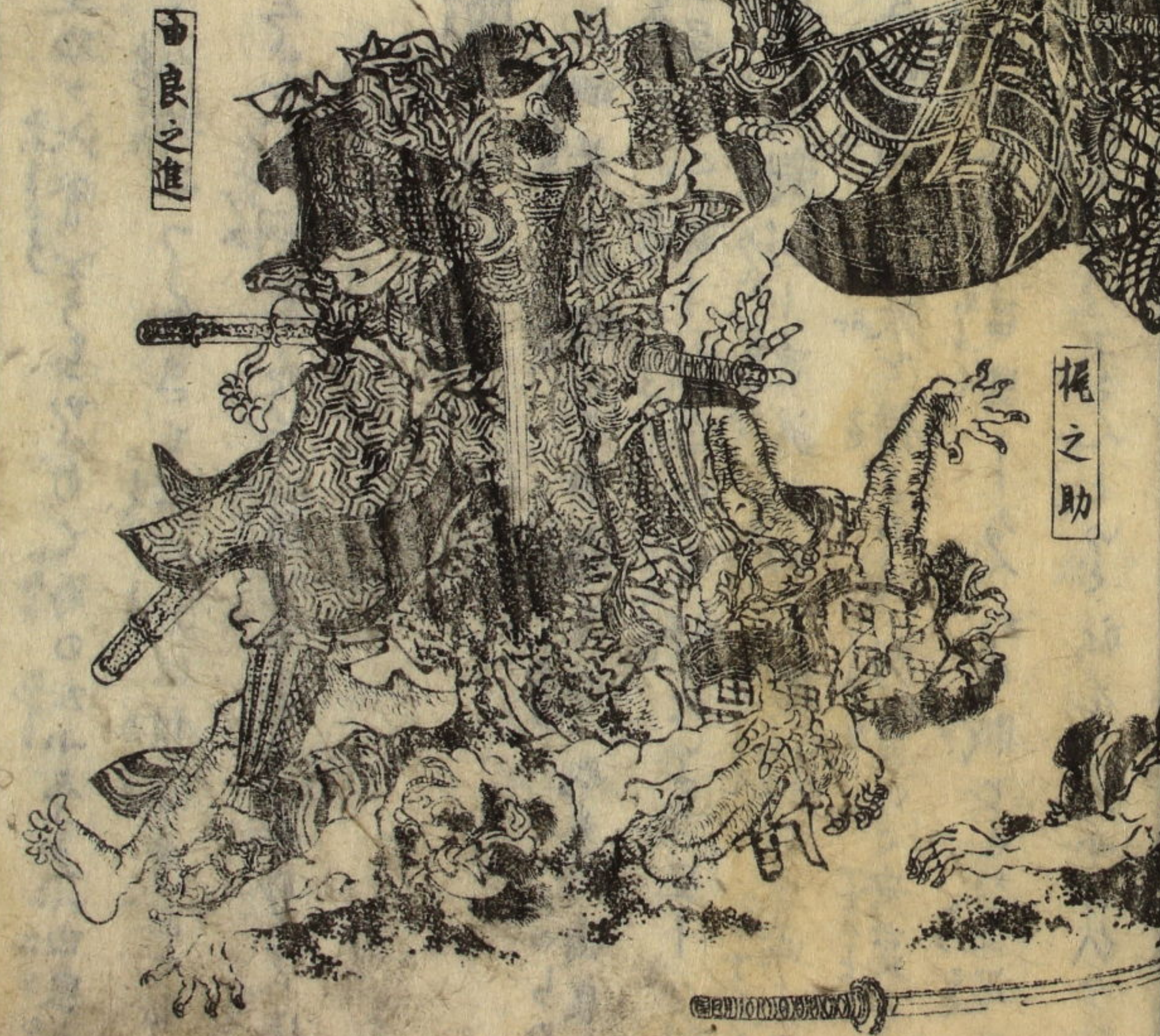
七の巻 五

一六

其二
圖



當場抄作丑生
姿惡貌
其心相見分天
地從來
如雜劇 在營
一酌介
年私醒之病主
人題 四 東



のしめ。梶之助と立三之助が大斧とちりかびて馬の左小をさぐり由良之進へ木鼠小猿が首と刀尖ふつぬきて右の方に付添ふ。之助の二人の英雄と馬の左右にさぐり手綱ひらり林麓とさぐりせり。道勇くし武武者がなり

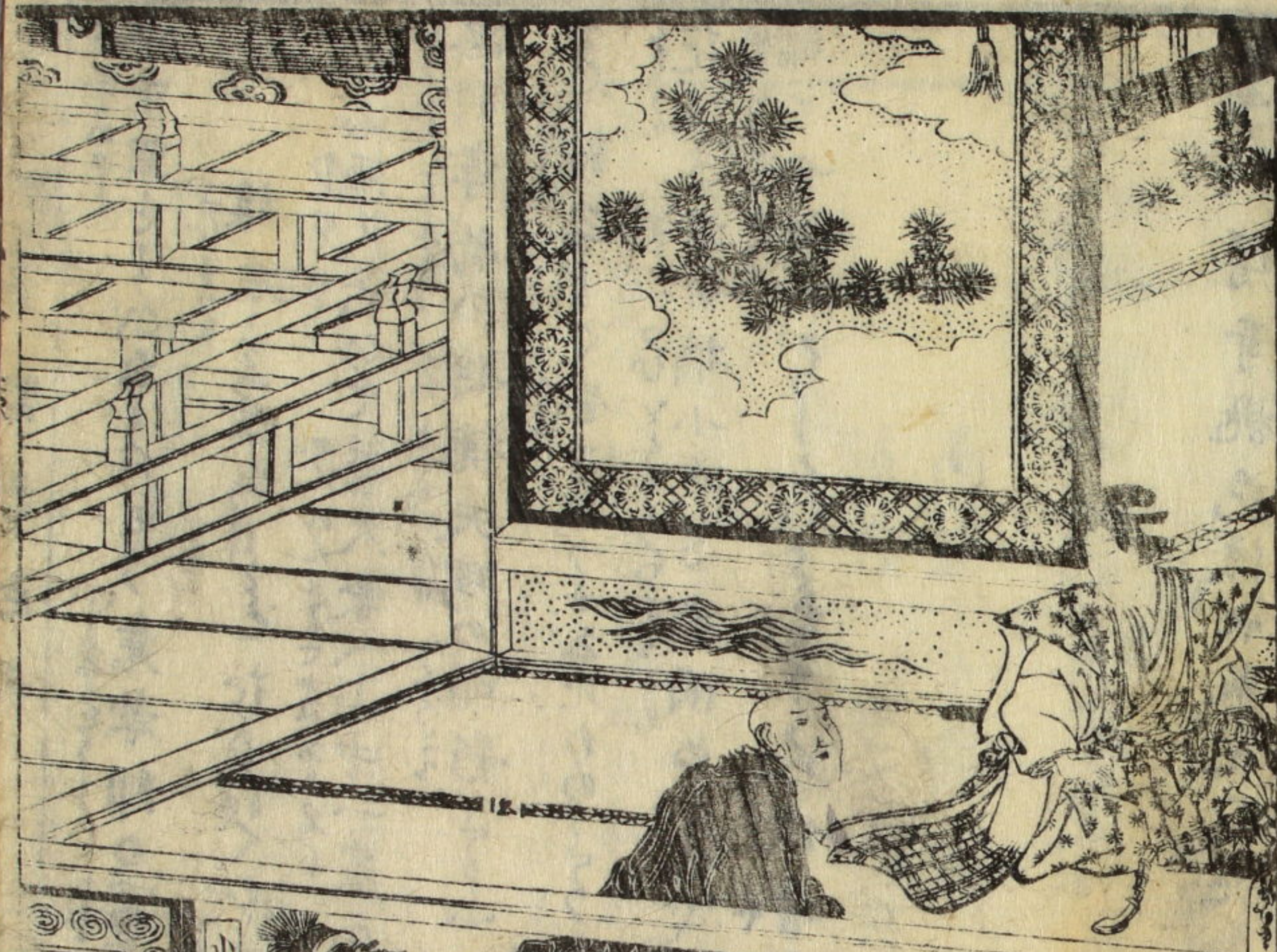
第十八回 迎福

本程舟人ぐい尾峯が家に取着る。時ハる夜も明ぬまぬ。由良之進の度乃仔細を一通の唇面小記し。縣令の官邸にさぐり呈し。縣守さぐりさぐり由良之進に對面し。忠義の程と賞讃なり。兩人の生捕と本國のめめつる警固の人夫と借もさぐり牙望いと安良小の士卒ハるれども貸中さん心あたらしく召具し。かめ賊とさぐり榮足乃さぐりまてい。即中の獄屋小敷おれやんと。いと所んじらふりひたれ

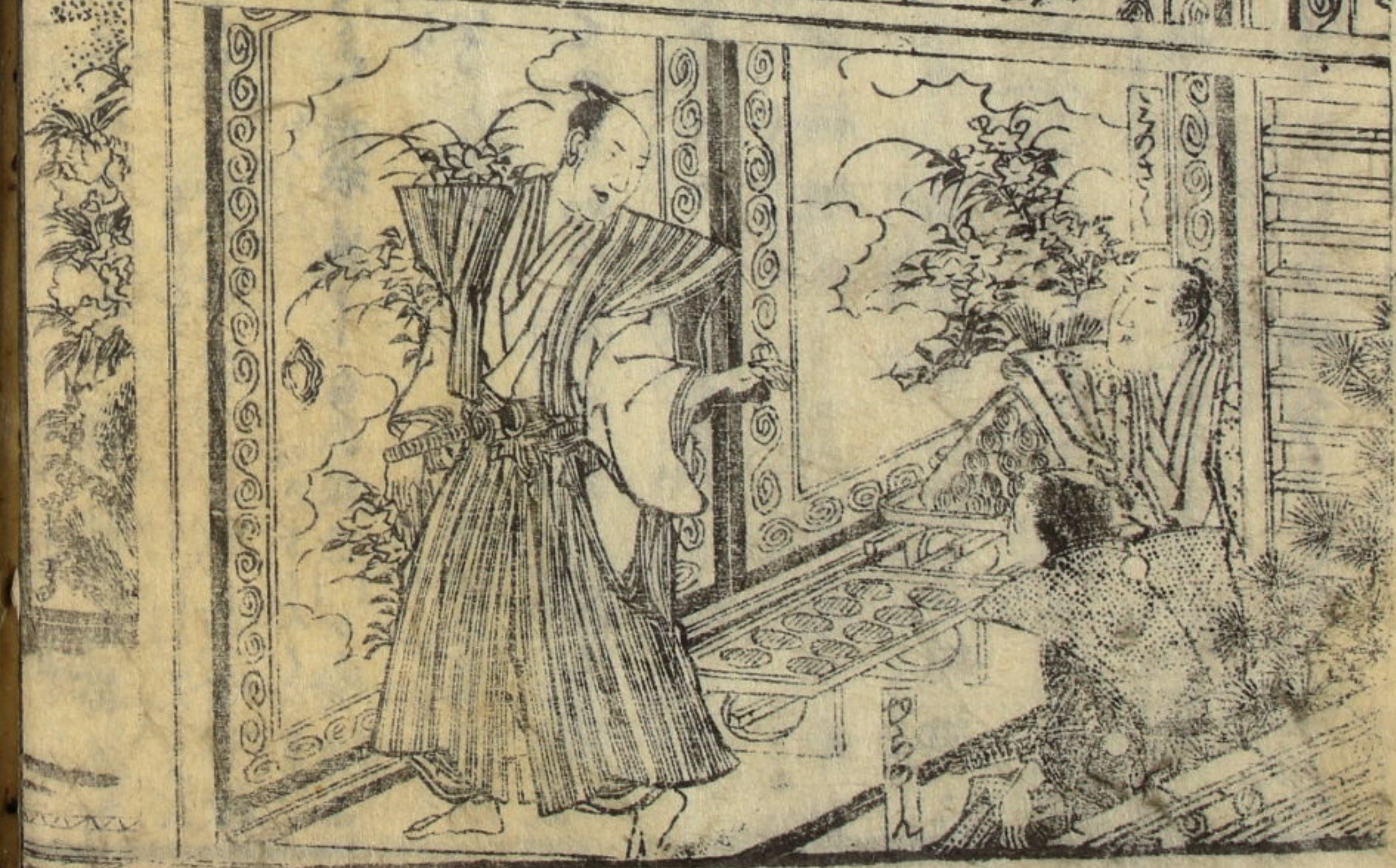
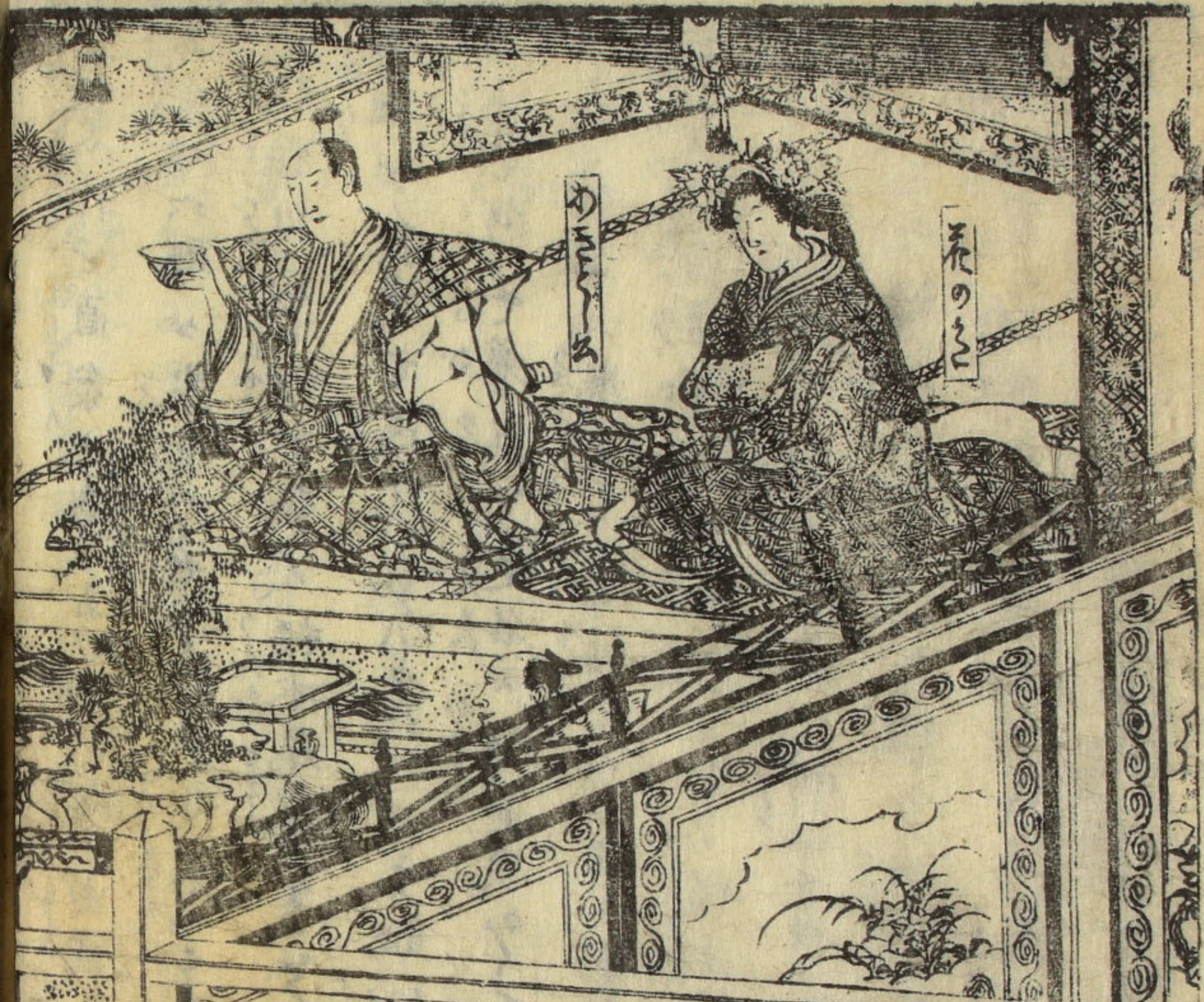
由良之進禮とのべ。詞ふまうせて梶之助牛平と獄まじり心あたらしく。旗とさぐりひととの尾峯とも伴ひて。とて六人のめすでに榮足の日限のさぐりぬれば。縣守より二人の賊多と囚車にのせめさぐり武士とさぐりて。これと護らせ。旭とさぐり小村中と榮し。ぬれば。近郷の諸人集ハまじり。肩と並べ袖とて。秘押立て見物と。かくて日わさぐりて。近郷のさぐり。由良之進が願書に。縣守より乃。添文と加へて。松江乃館小呈し。秋奉殿二通乃書と。披見あられて。且喜ひ。且おらる。時とさぐり。六人乃者とり。さぐりて。再度乃仔細とさぐりぬれば。由良之進。梶之助が片袖さぐりぬれば。苗字と記し。服紗紫袋六と射殺し。姓名と鑄つけり。矢の根をさぐり。左邊門が先尖の罪を。言訊ぬれば。牛平が白状とさぐり。掲馬の證據あたら。度明白ぬり。

縣守への謝禮の返書に使者とてえ警固の武士とてをを重く
 賞して飯田せしめり。備主從乃願にませ領所の廣場小一町四面の
 柵欄をせしめ警固の武士甲乙と守り三之助とせしめ。栢木小君と
 合手と。由良之進簀作と助太刀とせしめ。梶之助と獄舎より引
 けりて復讐の勝負と行せしむに三之助梶之助にまじり合二太刀
 三太刀うちあひし。何乃若もき提首ふして立上りたる見物
 の諸人あまうくと讚こゑをうけり。鳴いかなざりたり。秋奉の犬は
 よろこび。此日牛平とも刑戮せしめ。次の日六人の者ふ礼服をつりきせり。
 改めて對面し。三之助の本領安堵の久ありの加恩とせしめ。由良之進
 とび直參を召し。あつとありしに固辭し。さればりとのごとく
 山ヤが長臣として別小秋奉殿より食禄とせしめ。由良之進が代りとして

筭簀作と直參とありし由良之進が願めて。飭林鹿の苗名と
 名告せ。六郎が家とつせきるとも。小君のこゝろ。至孝なりとて。黄金百枚
 小化粧田五十町とせしめ。栢木尾峯等とて。褒美し。左門の廢鼓と
 修理とせしめ。返りあひなれば。三之助等なるのごとく。秘任賀客門前
 又市とありて。養名と遠名と輝せり。かくてのちかの圓字寺に於て左門
 あひ柴朶六鶴等が追福といふも。多る。此日栢木尾峯。仏前。又於て
 剃髮し。仏月禪師の徒弟とせしめ。栢木と栢樹尼といふ。尾峯と峯月
 と名づけ。勝地と庵とせしめ。て行ひをぬり。峯月尼の後年故郷に
 皈て。久矢橋川のわたりに秘り任。九十余才にして。正覺の終をこまじり。
 西矢剱東の山手小墓あり。世ふれと。養婦塚とあり。峯月尼が尾峯と
 といふ。時任より宮路山のふりて。山中三之助が出世の地あり。とて。後人



千祥
 萬復
 之の
 飯
 家
 再
 山
 中
 一
 家
 再
 松
 江



山中里とくびるふせり。堯孝師の富士日記は、富士日記は永享四年足利義教公の命に依りて作らる

族衣とくまのりともたのほくど民も賑ふ山中の里

さし心悪人亡びて善人衆へ山中一家の者目出度春とむ久々これ別

忠肝孝胸の明德天理の昭影とふ相てして、さる幸の時少くあひける

るん詞りゆく唇がぬつるるのりごう書もくとも竹馬子鞭とわぐる童

花間文章を摘小女号春雨のついで秋の夜長のさぐさふ一度巻と

繪て世教のくくんとさふ作者の幸ありと甚しうん

驚談傳奇桃花流水卷之五

繡像復讐言石見英雄録

全部 五十冊

南海 玉藻主人 編輯

浪花 一葉斎 教川 芳梅 画

○初編 系脚人作 ○二編 玉藻主人詞著 ○三編 東陽子詞著 ○第四輯以下作者一家

永録天正の頃流赤名嶋の勇士岩見重太郎橋樑季が生さふり長者修初

世一冊の武功大蛇の害を除去者程の妖を能く勇威を始め後天の橋を小い

廣瀬成瀬大川ホ三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し後小室町殿の奉仕に任官

給し、給し、水正は威勢をふるを同じく言を擧げ家が及那潘婦 岩瀬孝女 新月水子

給し、給し、黨の五雄と称する勇士の列傳靈猿忠魚の怪談ホ五輯あり益入佳境新話あり

南久寶寺町 心齋橋 小入

浪花書肆 伊丹屋善兵衛 板

